

32 明治廿四年七月六日 吉岡栄蔵妻さと 廿六年
さあへたずねる事情へ みな一つにわ たずねる一つの里
をきゝ ぜんへ事情なくバきく事できまい おいへつくす
事情によつ」(94ウ)

てはなしする 長らへ身の不足 だんへ心つくす 身がふそ
くなる どうなりこうなり りをきゝわけ 一つのこゝろ を
さめにやなるまい 身の処たいそふ 一時どうともゆわん 心
にあんしん 事情とうり 世上をみてそれよりおさめ 又けこ
ふの里もあるふ こふしてつくすへはこぶりを ふくんでど
ふゆふものである」(95オ)

とわ かならずおもわずして 心をおさめくれ 十分あんじの
里もおさめてくれねばならん この里をよふきゝとつて さと
してくれるよふ (95ウ)

33 明治廿八年三月廿八日 吉岡さと身上御願
さあへへたつねるところへの身上 里のゆりるところ
ちよとのりでない かならずかるくおもふな 一つなのおり
る里ハ なかへのりであるほどに ふしんにかゝつている
身にまた事情 どうゆふものとおもふだろふ ふるきところま
たかんなんくろ」(96オ)

ういんねんのみち ねんげん事上こゝろのり 三つ一つの里を
だいとしてよくきわけ つくすりハウけとるうけとる また身
上たいそうであるなれと うちへこゝろひとつ こゝろした
いである よくこの里をきかせおく (96ウ)

34 明治廿六年二月一日 河原町分教会部内 二百四拾八号
講元吉岡栄蔵 此度講社支所四間に二間半 二間に二間引付て
遷座二付御願

さあへたつねる事上へ さあへゆるしをこふへ
心をきのふかゝるがよい さあへゆるしをこふへ

(注) 正文には、明治26年2月2日の願として記載されてい
る。その割書きは「河原町部内吉岡栄蔵角井村に於て
寄所建て度きに付御願」である。

35 明治廿四年十一月六日 吉岡栄蔵 三十才
さあへ身上せまる 事上長らへてせまる どれたけきく い
かん なんととおもふ日々である どふなりこふなり ふかき
心じ上よくきゝとつておさめかへ どふなりこうなりのうち
あらため 身上あつて一つの世界 なかいあいたに」(97ウ)
することハあるまい さあ二日三日間あらため 一時さとてく
れ (98オ)

36 明治廿五年六月十日 吉岡栄蔵 三十一才
さあへたつねる事情へ 身上一条せまる里をたすねるとこ
ろ いかなるもきゝわけ ぜんへにもさとしたる 日々どう
なりこふなり日をこし ミちをはこぶつくす里ハ受取である
身上あつての一つの事情」(98ウ)

日々この里をきゝわけ たんのふの心をさだめ 身上あんじる

事ハいらん 日々たんのふへ里ハ受取 これだけさとしおこ
ふ」(99オ)

(注) 正文はほぼ同じで、補遺に記載されているが、この
写しには、大きく×印が付されている。その意味はよ
く分からない。

37 明治廿六年十二月十日 吉岡栄蔵 三十二才
さあへたすねるじ上へ 一時なるならん処 じ上たるねる
身上といふ いかなる事といふ処たすねる これまでしらす
への道なれと こふとゆふて一日さだめた それよりつたう
身上どうである いかなるもきいている 身上ふそくなる処わ
かるふまい」(99ウ)

とふゆふ事である 日々しやんしてもわからまい 一時なりて
くると さらへおもわづ 人にさとしてめんへ事上一寸に
いこまい なれどこれまでいかなるも をもいだし 内々もふ
こうなれば せけんめんほくないとこれもたす 内々あらため
こふなれば 世上なあ内々さらにをもわず これ一つさとし
お」(100オ)

こふ よふきゝわけてくれるよふ

38 明治廿七年十一月十九日 刻限ノ御嘸し
さあへこれへなるを尋ねかけよふといふ 一日へなるを
たすねる事ばかり 一寸とんな事たすねても こくけんとゆふ
里を知らしたる くわしいへ刻限身のうち」(100ウ)

くるしんでいふ処 皆たすねる しんどのうへの しんどふを
かけるよふなもの 刻限といふ事なをしてをいて 人間心なん
にもならん 刻限事上一寸もわからん 刻限なをしてしまい
刻限みのかし きゝのかし 子供のする事おやか今までみてい
た きいていたなれと 人間こゝろの里かさかへる それでみ
ていられん 刻限をたいとして」(101オ)

はしまつた道 一名ともいふ二名ともいふ 又それへどもい
ふ 刻限をよふしやんせよ それをなをしてをいて何もたすね
る事いらん 日々ではいり道が一寸つけてある 一つの里をた
かいへ刻限と云ふ いふ事であつた これ事上きゝわけ 十
分の道九分迄の道にのぼりた もふ一たんゑらいむつかしい道
をとをりかけている たんへこふせにやならん とうせにや
な」(101ウ)

らん みなだんへおもふた処がなんにもならん 刻限の
里をはづしてハはづすなり つくすまでのものや ワアト
アゝゝゝゝ さあへとれだけこふきこふけつ ちからつよ
きといふたとて はいるやいなや 一寸つれてとをる めん
へこゝろでをしてみよ ついてみよ たかつてみよ さわつ
てみよ どれたけのよふでも 身内かり物しんがわからねば」
(102オ)

とをもならん 一寸つれてとをるなれと せいへの事上 な
にたる事上ハさらさらおもふな これみてしやんせねばなるふ
まい (102ウ)

(注) 正文に記載なし。年月日に相違あるのか。要検討。